

【健康】

子どもも発症します 突発性難聴 聞こえる耳で対応し気付きにくい

突然片方の耳が聞こえなくなる突発性難聴は、大人が疲れなどからなるイメージが強いが、少数ながら子どもでも発症する。学校の聴力検査での異常がすぐに保護者に連絡されなかったため、突発性難聴の治療ができず、聴力を失った女子小学生の例もある。子どもの場合、片耳が聞こえない状態に自分で気付きにくい。治療が遅れると、聴力が戻らなくなるため、子どもにも発症するという認識が必要だ。

(野村由美子)

突発性難聴は、それまで特段、耳の病気をしたことがないような人が突然、耳が聞こえなくなり、数時間で高度の難聴に至る。片方の耳に起きることが多い。直前にめまいや吐き気、耳なりを起こす人もいる。耳の奥の内耳やまれに内耳神経（前庭神経、蝸牛（かぎゅう）神経）が障害を受ける病気だ。

■ 原因不特定

発症の原因は、内耳循環障害説やウイルス感染説などがあるが、特定されていない。「疫学調査では、非常に忙しくしている人や睡眠時間が足りない人、ストレスが強い人、生活が不規則な人、西洋型の食事の人などに多いという結果は出ています」と厚生労働省研究班の中島務・名古屋大耳鼻咽喉科教授は説明する。急激に高度な難聴を来す症例の中で、原因が特定できない場合に突発性難聴と診断される。

二〇〇一年の全国調査では、患者数は三万五千人。八年前の前回調査に比べ約一万一千人増加している。四十一～六十五歳の発症が多い。十歳未満の発症数は全体の約1%だが、四歳での発症例もあるという。

子どもに突発性難聴が起きた場合、大人と違い、耳が聞こえなくなっても、本人に自覚がないことが多い。症状は数時間で進むが、子どもは一対一で話す場合、無意識に聞こえる耳を使って聞くので、片方が聞こえないことに気付きにくいという。ふらつきやめまいが起きる場合などでは、「いきなり目が回ってどたっと倒れ、親が慌てて病院に連れてくる場合もある」（中島教授）が、子どもならではの柔軟な調整力で無意識に適応するケースが多い。

また、流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）による難聴や、母親が妊娠中にウイルス感染し、胎児が先天的になる難聴のように原因が分かっているわけではないので、いつ起こるか分からない。

■ 「目が回る」

子どもから「目が回る」「気持ち悪い」「耳が何だか変」などの訴えがあれば、突発性難聴の可能性がある。片方が聞こえないと、一対一の会話はできるが、ざわざわした中で耳を澄ます、ということができなくなる。電話の受話器を当てたり、イヤホンを着けたりした耳がたまたま聞こえない側になるときや、学校の聴力検査などが気付くチャンスといえる。

発症した場合、早期の治療が不可欠。第一に安静の上、ステロイドの内服や代謝改善剤投与などで治療する。発症後すぐなら聴力が改善する場合もあるが、四週間たつと、難聴状態が固定してしまい、治療効果が期待できなくなる。そこで回復しないと一生にかかわることになる。家庭内だけでなく、幼稚園や保育園、学校などでも、突発性難聴についての理解が必要だろう。

(2007年10月19日中日新聞)